

7月の3連休を用いて、私は仙台および石巻周辺へと港めぐりの旅へ出た。そのなかから、今回は松島についていろいろと掘りさげて書かせて頂きたい。また、松島以外の場所や港湾事情に関しては、弊社の出口が執筆しているので、そちらを見て頂きたい。

誰がどう決めたのかわからないが、日本三景と呼ばれるものが存在しており、宮城の松島、京都の天橋立、広島宮島の宮島がその3つに数えられている。恥ずかしながら私はこれまでずっと日本に住んでいながら、その1つも訪れたことがなく、22才にしてようやく、日本三景の1つを見ることができた。



松島には250以上の諸島が存在し、その湾内を遊覧船で廻るとするのが観光のスタイルなのであるが、この日は、3連休ということもあり、国内外からの多くの観光客で賑わっていた。乗船料は事前にまず大人1500円、乗船後、グリーン席と呼ばれる場所から楽しむのに600円程かかった。しかし、乗船客のほとんどがこの『グリーン席』にいくため、正直、ちっとも『グリーン席』と呼べるものではなかった。それでも、なんとか良い立ち位置を確保することに成功した。



前述したように、松島にはたくさんの小さな諸島が密集しており、そのひとつひとつが変わった形をしていたり、その見た目から連想されるようなものの名前が付けられていたりしている。いくつか有名なものを紹介しよう。

まずは仁王島。左下の写真を見て頂けたらわかる通り、仁王様が煙草をくわえた横顔に見えることが、この島の名前の由来であるという。

続いて鐘島、右下の写真を見て頂けたらわかる通り、島に4つの空洞があるのだが、ここに打



ち寄せる波の音が鐘の音に聴こえることから鐘島と呼ばれているらしい。左の写真が、双子島。似たような島が2つ並んでいることから、おそらくこう呼ばれているのだと考えられる。とてもじゃないが褒められたネーミングセンスではない。

2011年3月11日に起きた大地震の津波の影響で、一部の島は破損しているとの事である。

それでも、美しい緑の松の木々と綺麗な青い空を大いに堪能することができた。

約1時間かけて沖の方へ向かい、グルッと湾内を廻って戻ってくるというルートの航路であるが、その船の後ろをなぜだかずっとカモメが追いかけてくるのである。とても美しく愛くるしい姿である。昔、カモメの卵という銘菓をよく頂いたのだが、今回宮城の色々なところで萩の月とカモメの卵を見かけたので、カモメの卵発祥の地に来ることが出来たと感動していたのだが、どうやらカモメの卵に関してはそもそも岩手の銘菓のようである。

それでもこの愛くるしいカモメの遊飛行を見ている以上、きっと天橋立や宮島よりもここが1番

美しいとしか思えないのである。無論、天橋立も宮島も行ったことはないのだが。

松島に来たからには、行っておいてはならないのが瑞巖寺である。私が行った時はあいにく、平成30年の春にまでかけて行われている大修理の真っただ中であり、噂に聞いていた、手を叩くとこだまする本堂も見ることが出来なかった。また聞くところによると本堂に向かって歩く途中、美しい杉並木があったとのことであるが、残念ながら2011年に起きた大地震の影響でこちらも伐採されているとのことである。残念ながら、見ることが出来た場所はものすごく限られてしまっていたが、いくつか印象的なものを紹介してゆきたいと思う。まず境内にはいってまずあるのがこの鰻塚。いまではあまり聞かないが、この地がかつて天然の鰻がよく獲れたという事であり、その鰻たちの供養が目的で建てられたものだという。鰻が獲れなくなった今でも定期的に供養祭は行われているとのことである。

鰻塚のすぐ隣にはな

がいが洞窟群がある。ここはもともと納骨や供養に使われていた場所であり、洞窟の前にはたくさんの観音像が並んでいる

ことが確認できる。洞窟の奥の方には石碑のようなものも見えるが、どことなく気味悪くて、奥



まで入って行ってみたいくなる。

また興味深かったのがこの鉄道工事の殉職者を祀った石碑である。むかし、鉄道工事による

殉職者が
後を絶た
なかった
ことから、
この石碑
が建てら
れたとい
うことで



あるが、どうしてこんな場所に建てられたのであろうか。石碑の隣には大きな車輪もおいてある。

瑞巖寺に行くにあたり、事前に、ものすごい階段を上ることになるということを聞いてはいたのだが、大修理が行われていて、見られない場所も多かったせいか、もちろん暑いということは別として、そこまで辛さといったものは感じられなかった。唯一、階段をしばらく上りつづけないと見られないのが御霊屋である。『御霊屋』という名前には惹かれたが、建物自体はなんともいえないようなものであった。ここは伊達政宗の正室である愛姫の墓堂であるのだという。新緑に囲まれ、色使い等もたしかに綺麗ではあるが、そこまで美しいわけでもなく、圧倒されるものでもないので、正直名前負けしてしまっている感じはした。それでも貴重な歴史的文化財であるということは、私だって重々承知している。また、松島には五大堂と呼ばれる



伊達政宗が造営した最古の桃山建築と呼ばれるところがある。五大堂がある島までは写真のような綺麗な朱色の橋を渡っていく。五大堂そのものもだが、そこまでの道のりも細く狭いので、すぐに人でいっぱいになる。五大堂は小さな島のようなところにポツンとあるといった感じな



のだが、そこからの松島湾の眺めはなかなか素晴らしい。これを観て、松尾芭蕉が「松島や、嗚呼松島や、松島や」となるのも無理はない。

宮城県には塩釜という場所が存在するが、その塩釜に鹽竈神社という神社がある。車でかなり急な坂をずっと登って行ったところにあるのだが、たいして大きい神社というわけでもなく、強いて言えば青々とした緑に囲まれていて、高いゆえに、見晴らしもそれなりに良いといった感じである。

ほとんどの参拝客が車で坂をずっと登ってきており、最初はただ単に暑い

し、険しい坂なので、車で登ってきているのかと推測していたのだが、いざ神社につくと大きいアスファルトの



広場のような場所があり、そこにはドア、トランク、ボンネット、すべて開かれた大量の車が待機してあった。何かと思っばんやり見ていたら、祈祷師みたいのが現れて、大麻を振り回し始めたので、おそらく交通安全の祈願か何かで訪れる人が多い場所なのかもしれない。左下の写真の牛は商売繁盛を祈願するものである。牛の涎のように細く長く商売が続くようにと、牛を撫でて涎をいっぱい垂らしてもらおうというところからきているのだという。こ



れは私も初めて聞いたが、結構面白いと感じた。肝心な本堂であるが、まあまあそれなりに立派



だなどといった感じである。鹽竈桜と呼ばれる桜が国の天然記念物に選ばれているみたいであるが、あいにく私が訪れたのは7月だったのでちっとも桜を満喫することが出来なかった。おそらく、この鹽竈神社というのはこの鹽竈桜が有名で、多くの観光客はこの桜を見に訪れるのではないだろうか。

鹽竈神社の本堂に向かう途中に通る門には、狛犬でも金剛力蔵でもなく鹿がいる。奈良の東大寺には本物の鹿があたりをウロウロしているが、ここの鹿はちゃんと鎮座して番をしている。神社で鹿の像をいままで見たことはなかったが、確かにめずらしいので興奮はしたものの、普通神社にいるのはもっとたくましそうな像である。確かに鹿はよく神の使いみたいにいわれているかもわからないが、やっぱり弱そうだから私はあまり好きではない。

松島について、いろいろ書かせて頂いたが、やっぱり自然が豊かで美しいところであった。

瑞巖寺の本堂を見ることが出来なかった点は非常に残念ではあったものの、十分に松島を満喫できたと思う。これに懲りずに天橋立、宮島にも行ってみたいし、東北だってもっと追求してみたいと考えている。今回の松島のレポートはあくまで第一弾であり、これからも日本全国いろいろな所に足を運んで、その土地で私が感じたこと等をどんどんストレートに書いていきたいと思う。



ウェバー伊安